

「一流の条件」

一流の企業のみが残り、二流は残らない。では、一流とは何か。

「ものの考え方が一流かどうか。社長から社員に至るまで長期展望を持っているか。」

第一は、やはり社員のもの考え方が、経営者は経営者、管理者（幹部）は管理者、営業は営業、事務は事務として、ものの考え方が一流でなければならない。さもない考え方や、会社でありながら長期展望一つ立たないというような、ただ上から言われた事だけしていればいいという幹部では、それは監督者であって、管理者の資格はありません。

「一流の機能を持っているか。誠意と共に能力があるか。」

第二は、如何に誠意があっても、一流の機能を持っていないければなりません。誠意があっても能力がなければ、これはやはり一流ではありません。

「人間関係を重視しているか。」

第三は、人間は努力以前の運があるようです。しかし、運などと言えば、これは宗教論か運命学になってしまいますので、それを広い意味に於ける人間関係ということで認識して下さい。

やはりこうした条件を備えない限り、一流の企業とは言えないのではないのでしょうか。もし、この会社が一流かどうかを大ききで決めるなら事は簡単です。でも、大きい所がどうして一流なのでしょう。何を以って一流と言うのかは大変難しいことです。

僕が思うに、経営者と幹部や社員達が何度、ピンチを勝機に置き換えて来たか、などという事も一流の条件の一つではないかと思うのですが。金があるとか、組織が大きいとか、どうでもいいことです。昨日まで良かった事が、明日も良いという保証はどこにも無いのですから。

やはり苦労人の集まりで、読みも深く経験も豊かで、しかも業界の先端を切っていくのでなければ、、、という所に落ち着くのではないのでしょうか。

余裕と余分とは違うと思うのです。

余裕とは、戦力の充実であり、余分とは、人数のみ。

中々、気の付きにくいことです。やはり、余裕という事は飽くまで、それだけ苦勞をしたということであり、先を見越していることであり、間に合う人が揃っており、要するに、戦力の充実が余裕なのです。

余分というのは、ただゴロゴロと人がいるというだけで、似て非なるものです。

世の中は、皆そうです。部下との間もそうです。

和解と妥協は違います。和解というのは、一本筋の通っていることが和解です。

妥協というのは、まあまあと迎合することです。一本の筋が通っていないことです。

こういうことも、一流の企業云々という中で計算に置いておかなければなりません。

一生涯の勉強ということに尽きるのです。

根本的な問題を振り返ってみると、哲学を持たずしては器は大きくなりません。

哲学とは、1. 人生観の確立 2. 社会観の確立 3. 価値基準の確立です。

少なくとも、この三つの「確立」を自分なりに持っていなければ、一流とは言えません。

世の中は所詮、己の器以上に己の企業は大きくなりません。大きくとは規模のことを言うのではありません。「器＝人格」の大きさを言います。つまり、企業は、社長と社員の人格レベル・能力レベルにしか、ならない。ということです。

己の器が小さくて、大きく育つ道理がありません。

人生観、社会観の確立、価値基準の確立、何が価値か、何が幸福か。こうした人生観の確立を持たずして、部下を持つ事が許されるのでしょうか？子供を産めば親になるでしょうけれど、本当の親になるということは難しい事です。今一度、自分自身を振り返ってみてはいかがでしょうか。

我々は、常に己を振り返りながら勉強して行きたいとつくづく思っている次第です。

先ほどの運というものの話しですが、この広い地域の中で、例えば〇〇の商品が良いという評判を取るのも、宣伝と言えばテクニックになっていきますが、横の繋がりということも配慮し、重んじていく必要があると思うのです。殊に人間には「あいつはツイている」というように、努力以前の運の良し悪しがあるということも事実だと。

苦勞された人ほど、こういうことの理解が付くと思います。

若い間は、努力だけが全てであると思いがちですが、それ以前があるということを知っている必要があります。それを言うとまた宗教論になってしまいますが。

松下幸之助は創業当初も役員抜擢も、運の良い人間ばかり集めたという話があります。

例えば、自動車事故があつて同乗者は大ケガをしたが、一人だけはかすり傷一つ負わないというような人を、、、、これも大事なことです。

かつて、日露戦争時、山本権兵衛が連合艦隊司令長官として東郷平八郎を選んだ時のことです。

東郷平八郎は鹿児島の人ですから、周囲を薩摩の閥で固めるらしいという噂を耳にされた明治天皇は、山本権兵衛をお呼びになって確かめられた。

すると、山本権兵衛は「三人ほど候補がありまして、甲乙付け難く、、、としましたが、東郷を連合艦隊司令長官に選んだ理由は、彼は運の良い男だからです。」と言う。

明治天皇は「そうか。」と仰られ、ご納得召されたと言われています。こういうところが大人の世界でしょうか。

無口な東郷平八郎は、良き部下・秋山真之という名参謀に恵まれ、あのコンビでなければ、日本海海戦の勝利は無かったものと思います。大山巖元帥に児玉源太郎という名参謀あり、東郷に秋山ということも、運が良かったということではないでしょうか。

どうか、皆さん方の会社の物的、人的基礎を根本問題に立ち返って固め、一流への道を共に歩んで行きたいと思います。